現代中国社会で交錯する「記憶の再生」

石井　知章

及川淳子著
現代中国の言論空間と政治文化

A5判　334頁
御茶の水書房［7980円］

本書は、李鋭という中国共産党の改革派老幹部に注目しつつ、現代中国の政治改革をめぐる言論空間を、一つの政治文化論としてアプローチを試みる現代中国政治社会論である。李鋭氏は、党内最有力リベラル派の一人であり、最近では、「我が国の政治体制改革に関する建議」（『炎黄春秋』、二〇〇三年第一期）をまとめ、『氷点週刊』の停刊処分をめぐって行われた抗議の共同声明への一三人の署名人の一人として、さらに二〇〇八年の劉暁波を中心に提出された「〇八憲章」に関連し、言論の自由や政治体制改革についての意見書、「〇九上書」をまとめたことなどで広く知られている。

李鋭氏は一九三七年、中国共産党に入党し、中華人民共和国建国後、『新湖南報』新聞社社長、湖南省宣伝部長などを経て、一九五二年、水利電力副部長となった。長江三峡ダムの開発計画に異を唱え、その大胆な物言いがかえって毛沢東に気に入られ、一九五八年には毛沢東の兼任秘書となる。その後、大躍進運動を批判し、一九五九年の廬山会議では「彭徳懐反党集団」の一員とみなされ党籍剥奪処分を受け、文革期には八年間、秦城監獄に投獄された。一九七九年の名誉回復後、中共中央顧問委員会委員などの要職に就き、退職後は毛沢東研究に取り組んで「革命に功あり、執政に過ちあり、文革に罪あり」などと、一貫して歯に衣着せぬ言論を展開してきた、数少ない党内リベラリストの一人である。

本書は、こうした李鋭氏の言論・行動を取り巻くネットワークに着目しつつも、人物論や制度論、政治構造論といった既存の分析枠組みにとどまらず、中国の現実により接近して、「中国的なもの」という、より本質的な側面を浮き彫りにす

ることを主な課題とする。「特殊性を明らかにしていくことによって、逆説的ではあるが、何らかの『普遍性』にたどり着くのではないか」とする及川氏の問題意識は、筆者のそれとも大きく重なり合っている。さらに及川氏は、「自由化と規制化が混沌としている言論空間についての研究は、中国の現実に向き合う研究者に対しても、ある種の政治的な緊張関係を迫っている」と指摘する。これはややもすると、強権的な言論抑圧社会としてのみ映ってきそうな中国の実像を理解するうえで、中国研究者ばかりでなく、現代中国社会について考えるすべての人々に共有されてしかるべき、基本的スタンスを示唆するものである。

とりわけ本書は、保守派対改革派といった現実政治の対立構図の中での剥き出しの権力闘争について描くのではなく、むしろ改革派の共産党幹部の中でも、言論封殺に対する抗議活動の中で積極的な役割を果たす党内リベラル派と言論空間との連関性について注目していく。そうしたプロセスに、「文化大革命」という政治的評価の微妙なテーマをどれだけ扱えるかが、その言論媒体、そしてそれを受容する国家・社会の自由度を測る上の重要な指標になることはいうまでもない。たとえば、一九九六年の文革三〇周年に際し、「文革は中国にあるが研究は国外にある」といった状況を変革しようと特集を組んだ雑誌『東方』は、文化部による事前調査で、印刷停止処分となった。これには、李鋭の「片時も理論思考せずにはいられない」と題した論文（同年第二期）で、「マルクスのどこが正しくてどこが空想的で実行できないのか、レーニンやスターリン、毛沢東のどこが正しくどんな過ちを犯したのか、いったいどんな問題なのか、理論の問題か、はっきりさせなければ再び過ちを犯してしまうだろう」としたことが、マルクス主義に反するものと批判されたという背景がある。だが、これは明らかに、「各人の自由な発展が、万人の自由な発展の基礎となる」とした、本来のマルクスの思想のもつリベラルな言説をあからさまに抑圧するものである。

このような言論状況に対して、歴史批判を含む時事問題や政治体制改革に関する評論を数多く掲載してきた雑誌『炎黄春秋』は、共産党内の改革派を中心とする討議の場としての言論空間を提供してきた。その中心的存在ともいえる「李鋭ネットワーク」をめぐる政治力学を考察する上で、中国国内におけるいくつかの言論媒体と、党＝国家権力とじかに衝突する対抗言説との拮抗関係とは、決定的な重要性を帯びるものとなる。とりわけ、停刊処分となった『東方』では、文革をテーマとしたのはわずか二本の論文に限られたが、他方、『炎黄春秋』では、創刊以来、一三四本もの関連論文が掲載

されてきた。ここには、多くの若手知識人たちが活躍したのが『東方』であったのに対して、『炎黄春秋』には、李鋭のような改革派の老幹部、とりわけ胡耀邦時代のネットワークが現存しているという、編集体制上の大きな性格的違いがある。とはいえ、ここでも大きなバックボーンとなっているのは、「李鋭ネットワーク」に他ならない。

こうした『炎黄春秋』における歴史の記憶がどのように扱われるのかというテーマにアプローチすべく、本書は「記憶の再生」という分析枠組みを採用する。それがどのように扱われるかは、党＝国家・社会において、どれだけ「リベラルなもの」が許容されているかを測る上での、重要な指標となる。たとえば、八〇年代という政治改革の時代の幕開けを告げた鄧小平による「八・一八講話」（中国共産党政治局拡大会議、一九八〇年八月）とは、実際には、いったい中国国内でどう扱われたのか。ここで鄧小平は、中国共産党史上はじめて、過去における「封建専制」の存在そのものを公式に認め、それが文革という悲劇を招いた根本原因の一つとみなした。鄧は、「（文革の発生が）わが国の歴史上の封建専制主義の影響と関係があり、また国際共産主義運動時代におこなった各国の党の活動において、指導者個人が高度に権力を集中させていたことと関係がある」と認めつつ、それを如何に克服するかという現実的政治課題に結び付けたのである。だが、こうした建設的な対抗言説は、とりわけ天安門事件以降の江沢民体制下において、グローバリゼーションと市場経済の進展とともに拡大してきた「二桁成長」の影で、長い間、タブー視されてきたのである。

最新刊

ワキの視点から読み解く画期的なガイド！

三国志
40人の名脇役

渡辺精一 著

B6判変型・192頁
●1680円（税込）●

主役に劣らぬ強烈な個性で、乱世の舞台で輝きを放った『三国志』の名脇役40人を紹介。

1．近くて遠い主役の座
2．脇に徹した生きかた
3．名参謀の条件
4．乱世に個性を貫く

心に響く三国志
［英雄の名言］

渡辺精一 文／南岳杲雲 書
B6変型・160頁●1365円（税込）

二玄社
東京都文京区本駒込6-2-1
Tel.03-5395-0511 http://nigensha.co.jp

こうした「禁区」に果敢に挑戦してきたのが、李鋭とその力強いネットワークであった。たとえば『炎黄春秋』（二〇〇五年第八期）に掲載された杜光の「反封建専制の里程標：鄧小平『八・一八講和』」では、「政治の民主化は封建専制主義を粛正する最良の手段である」とし、「革命未だ成らず、同志なお須く努力すべし」とする孫文の言葉を引用しつつ、政治体制改革の必要性を強調した。にもかかわらず、中国の民主化は一向に進まないばかりか、むしろ今日の中国社会で進行しているように見えるのは、人権など「普遍的価値」の実現よりも、経済成長を優先する「開発独裁」のさらなる強化である。一方、毛沢東時代に駆使された国家統制の論理の「部分的」導入によってこうした「新自由主義」による市場経済至上主義を批判すると称する汪暉ら「新左派」ですら、「脱政治化」の時代における毛沢東主義への回帰という「新たな政治主体をもう一度さぐってみようとするプロセス」にこそ、「政治領域を再規定しようとするプロセスが随伴する」と主張している（『世界史のなかの中国』青土社、二〇一一年）。だがこれは、一党独裁体制下にある現代中国において、毛沢東時代の「前近代」的手法によって、現代中国における人権抑圧的政治プロセスがまるごと隠蔽されてしまうほど、高度に「政治化」されているという事実を包み隠すものに他ならない。毛沢東思想の「歴史的遺産をもう一度持ち出して揺り動かそうとすること」は、「未来の政治発展に向けた契機」を含んでいるどころか、今回の重慶事件が如実に示しているように、「封建専制」という名の「前近代」への後退をもたらすだけなのである。

このように、現代中国における「記憶の再生」は、八〇年代という「未完のプロジェクト」（ハーバーマス）としての「近代」の経験としてではなく、六〇年代以前の「前近代」への後退という経験としてのみ、さらに力を強めているように見える。実際、昨今の汪暉は、重慶事件をめぐって多くの論者によって指摘された「文革の再演」論が「何の根拠も持たない」ものであり、「それは空洞化したイデオロギーに基づいて作り出されたもの」として、「新たな新自由主義改革のための政治条件」を作り出している、などと自己弁護すらしているのである（『世界』二〇一二年七月）。ただし、ここでの問題とは、こうした新左派らの台頭とも相俟って、日本の一部の「進歩的」知識人とともに、なぜ人々はいまだに文革や毛沢東の時代を肯定的に評価しようと欲するのか、ということであろう。

こうした現在の中国社会の抱える諸問題を考えるうえで、中国における老骨のリベラル、李鋭氏から発せられる言葉は、きわめて重い意味を持つ。李氏によれば、党の長年にわたる

歴史の中で最も改め難い誤り、それはただ一文字、「左」である。王明の「左」傾路線や延安整風運動を経て、毛沢東思想は党の認識を統一し、革命は勝利を収めたが、王明の「左」路線や解放戦争時期の土地改革など「左」の誤りが依然として存在した。特に一九五七年から七八年までの、反右派闘争、大躍進運動、反右傾闘争、社会主義教育運動から文革の一〇年に至るまで、中国の政治はもっぱら「左」の誤った道を歩んだ。つまり、「左」の亡霊はいまだに去っておらず、「封建専制主義」の害毒は、各級の幹部のなかに、いまだに程度の差こそあれ存在している、というのである。

こうした「記憶の再生」を八〇年代（政治体制改革の時代）への回帰に向けて批判的言論を展開する李鋭氏は、胡耀邦をはるかに超えて、ついには天安門事件で共産党史そのものから葬られていった趙紫陽へと向かっていく。『炎黄春秋』における趙紫陽の「記憶の再生」が、中国における言論空間におけるタブーへの大胆な挑戦であることはいうまでもない。ここで及川氏は、趙紫陽をめぐる李鋭氏による言説の意図するものを、（1）趙紫陽の再評価、（2）政治体制改革の推進、（3）天安門事件の再評価、という三点に集約する。いずれにせよ、文革という「前近代」的非合理性をめぐる「記憶の再生」が、今回の重慶事件でも再び現実のものとなったことになる。本書を通して、対外的にはますます覇権的になり、対内的にはこれまで以上に抑圧的になっているように見える中国共産党内部にも、じつは李鋭氏のような骨太のリベラリストがいまだに存在しているという事実に、多くの読者が驚き、かつその際どい言論空間におけるぎりぎりの闘いを讃えるであろう。そうした党内リベラリスト群像の奥深さと底力を知るうえで、本書は目下のところ、最良の、そして唯一の著作である。

（いしい・ともあき　明治大学）

◆